

第46期生 閉講式・委嘱状を受けての感想

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

理事の方々、養成サポーターの皆様に見守られて46期生15名は委嘱状を受け取りました。委嘱期間は1年間。1年更新が立ちはだかっています。つまりやっとスタートラインに立ち、1年後のゴールに向けて今まさに1歩踏み出そうとしているのです。そして1年後の壁は毎年毎年立ちはだかるのです。自己研鑽の日々が続くのかと思うと、とても気が重くなります。

さて、衝撃的な自殺の報道がされるたびに「いのちの電話」のテロップが流れ、新聞に取り上げられます。それを見て、すぐるような思いで電話をしてくる方に、私は寄り添うことができるだろうか？ 傾聴以上の救いを求めてこられた時にどう対処したら良いのだろうか？

「いのちの電話」という言葉の重みとボランティア相談員との間にギャップがあるような気がします。また、研修期間の1年で取った電話の中には「いのちの電話」とはかけ離れている内容も多かったし、反対に私が受け止めきれない重い内容の電話もありました。しかし、ともかく同期と共に新しい1歩を踏み出していこうと思います。 (T.N)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「心の叫びに寄り添うこと」

そっと寄り添う。これに徹する。

心の叫び、苦しみ、言えないこと、誰にも相談できないこと、話を聴いて貰いたいこと、胸につかえていること、悶々としていること、悩んでいること、に。

相談、話、聞いて欲しいこと、悩みごと、誰にも話せないこと、生きていくのが苦しいこと、どうして良いのか分からないこと、さまざまな種類の電話相談がかかってくる。

電話を受けるのは、果たして私で良いのかと、毎回複雑な気持ちで通話者の話真剣に耳を傾けている。

ああ、人生はさまざまだ。

電話の先にはいろんな思いを抱えて、悩み苦しみ、今を必死に懸命に暮らしている方がいる。

通話者の気持ちに寄り添うことの大切さ。

寄り添うことしかできない。

相談する人がいない。

悩みを聞いてくれる人がいない。

ただ、話を聞いて貰いたい。

誰にも話ができない、相談ができない。

心のモヤモヤを、どのように解決したら良いのか？

さまざまな思いを抱えている通話者からの生の声がある。

今後も相談員としての役目を果たして行けるのだろうか、複雑な心の声もある。

気持ちを楽にして通話者の話を丁寧に聴くことだけを考えていきたい。

自分の当番に一喜一憂せずに、健康で元気に息長く続けて行きたいと、思っている。

(T.T)